ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

特集　雑誌探訪

雑誌をめぐる座談会　探して、見つけて、また探す
国立国会図書館の雑誌

2011.2
No.599

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
　　03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休　館　日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00　土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。
資料請求時間　月～金曜日 9:30～18:00　土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。

即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00　土曜日 10:00～16:00
後日複写受付　月～金曜日 10:00～18:30　土曜日 10:00～16:30
オンライン複写受付　月～金曜日 10:00～17:30　土曜日 10:00～15:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　資料提供部　利用者サービス企画課　03(3581)2331　内線26111

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
利用案内　0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休　館　日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
　　科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求時間　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日複写受付　月～土曜日 10:00～17:45
オンライン複写受付　月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休　館　日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。

第一・第二資料室の利用時間
閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00
資料請求時間　火～土曜日 9:30～16:30

複写サービス時間
即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00
後日複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

2 February

CONTENTS

02 ゆめの手まくら　白井光太郎作画の黄表紙
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 特集　雑誌探訪
05 雑誌をめぐる座談会　探して、見つけて、また探す
栗原　裕一郎、柴野　京子、南陀楼　綾繁
14 国立国会図書館の雑誌
22 図解　国立国会図書館のしごと　ISSN（国際標準逐次刊行物番号）

24 言葉のエッセイ　第2回　動詞のいろいろ

21 館内スコープ
雑誌記事索引　1千万の記事・論文へつながる道
25 本屋にない本
○『新潟県中越大震災と史料保存（1）
長岡市立中央図書館文書資料室の試み』
○『日本のふるさと野菜』
○『新発見・豊臣期大坂図屏風』
28 NDL NEWS
○第52回科学技術関係資料整備審議会
○おもな人事
○法規の制定
○東京本館で新たな書を展示

30 お知らせ
○国際子ども図書館講演会「日本の子どもの文学
ー昨日・今日・それから」
○レファレンス業務に関する研修に講師を派遣します
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 February

国立国会図書館の蔵書から

ゆめの手まくら　白井光太郎作画の黄表紙

豊田　さおり

国立国会図書館は、植物学者白井光太郎（1863-1932 **写真1**）の旧蔵書約6千冊を所蔵しています。昭和15（1940）年から17年にかけて購入し、昭和51（1976）年には遺族から白井の日記や自筆稿本類が寄贈されました。この「白井文庫」は「伊藤文庫」とともに国立国会図書館の本草関係コレクションの中核をなすもので、小野蘭山（1729-1810）など本草学者の書簡や動植物の図集『写生物類品図』（服部雪斎ほか画）[1]といった特色ある資料が含まれています。

しかし、白井文庫に含まれる『ゆめの手まくら』は、本草関係の資料ではありません。元の表紙も題簽[2]もなく、版心[3]に「ゆめの手まくら」とあるのがかろうじて読みとれる程度です。筆者ははじめてこの本を手に取ったとき、その鮮やかな色彩に驚きました。全15丁（30ページ）からなる本の第14丁表から巻末が欠けており、欠けた部分に手書きの絵と文が補われているのです（**写真2、3**）。下書きの線は残っているものの、登場人物の描き方はなかなか堂に入ったものです。巻末には「南杣笑楚ま人作[4]　神風山人補欠　明治廿二年九月四日夜」「明治廿二年九月四日夜　なくさみにしるす　農林学校官舎にて　こま場　白井」の書き入れがあり（**写真3**）、白井が東京農林学校教授の職にあった明治22（1889）年に描いたことがわかります。

『ゆめの手まくら』は元々『敵討春手枕』という書名の黄表紙です。あらすじは、百姓七五郎が士分に推挙してくれた恩人山本民之介を殺害、逃亡するが民之介の遺児栄次郎に討たれるというものです。この『敵討春手枕』と『ゆめの手まくら』の同じ箇所を比較してみましょう（**写真2、4**）。仇の七五郎に斬りかかる栄次郎、白井の絵は歌川豊広の原画より躍動感があるように筆者には思えます。『敵討春手枕』は、とどめを刺した栄次郎が野次馬のやんやの喝采を浴びる第15丁表で終わっていますが、『ゆめの手まくら』は、栄次郎が殿様から褒美をもらい家老の娘と結婚して「めてたきはるをぞむかへけり」という第15丁裏（**写真3**）まで、オリジナルより半丁分多く書き継いで物語をしめくくっています。

弟子の末松直次によれば、白井は幼少より絵を得意とし画業で身を立てようと思ったこともあるそうです。白井文庫には植物採集日記や紀行文も含まれますが、その多くに挿絵が付いています。たとえば、明治14（1881）年に友人7人と江ノ島・鎌倉へ旅行した際の記録『江嶌鎌倉紀行』には、東京から江ノ島まで夜通し歩こうと意気軒昂に出発したものの疲労と空腹で仲間が脱落する様子を面白おかしく書き、江ノ島の風景や鎌倉大仏の絵を添えています[5]。

「神風山人」という筆名からもうかがえるとおり、白井は先祖伝来の風習を重んじ西洋嫌いを自認していました。学生時代には襟巻、足袋、手袋、帽子を西洋風のものとして身に着けなかったり、牛肉は極力食べなかったりと徹底したものでした。しかしその志向は単なる好悪の情に終わることなく、明治維新後は閑却されがちであった江戸時代の本草学に目を向ける原動力になったといえるかもしれません。

白井光太郎持ち前のユーモアと江戸の古事に思いを寄せる一面がうかがえる一冊ではないでしょうか。

（とよだ　さおり　主題情報部古典籍課）

1　＜請求記号　寄別10-43＞「貴重書画像データベース」所収。
2　書名等を記した細長い紙片。表紙に貼られることが多い。
3　袋綴じの本で、紙の中央の折り目に当たる部分。
4　序文に「南杣笑楚満人述」とあることから白井は楚満人を作者としているが、実際はその門人待名斎今也の作である。
5　礫川漁人誌『江嶌鎌倉紀行』　明治14（1881）年写　1冊　17cm　＜請求記号　特1-3626＞

写真１

写真３

写真２

写真４

ゆめの手まくら　待名斎今也作　歌川豊広画

江戸　和泉屋市兵衛　文化元（1804）年　1冊　18cm

＜請求記号　特1-2814＞

※東京本館所蔵

※白井文庫は、「貴重書画像データベース」や電子展示会「描かれた動物・植物　江戸時代の博物誌」で一部資料の画像をご覧になれます。『ゆめの手まくら』を含む残り大半の資料も、平成23年度中にインターネット上で提供を開始する予定です。

写真１　白井光太郎肖像
（『白井光太郎著作集　第６巻』　科学書院　1990　口絵）
写真２　『ゆめの手まくら』第13丁裏～第14丁表
写真３　『ゆめの手まくら』第15丁裏～第16丁表
写真４　国立国会図書館では全丁そろった『敵討春手枕』も所蔵する。
＜請求記号　207-1788＞第13丁裏～第14丁表

参考文献
●末松直次「本会初代会長白井光太郎先生の生誕第百年を迎えて」『日本植物病理学会報』27（3）1962　pp. 99-101
●『国立国会図書館所蔵個人文庫展　展示会目録』国立国会図書館 1982
●木村陽二郎編『白井光太郎著作集 第5巻、第6巻』　科学書院 1988-1990

特集　雑誌探訪

雑誌は、図書館で探しにくい、また、資料として管理しにくいといわれます。図書館のヘビーユーザーはどのように雑誌を使っているのか、また、国立国会図書館では、蔵書の約4割を占める雑誌をどのように集め、保存しているのか、その一端をご紹介します。

雑誌をめぐる
座　談　会

探して、見つけて、また探す

栗原　裕一郎
（評論家）

柴野　京子
（出版史研究者）

南陀楼　綾繁
（ライター、編集者）

聞き手　小島　庸亨（資料提供部雑誌課）
小林　昌樹（主題情報部人文課）

調べもの悲喜こもごも

小島　みなさんはいろいろな図書館で資料を使いこなしておられると思いますが、きょうは雑誌についてお話いただければと思います。栗原さんの『<盗作>の文学史』は膨大な文献調査のもとにこれまでの盗作疑惑を分析しておられて、調査にはかなりのご苦労があったようですね。

栗原　一番大変なのは、必要な資料がどこにあるかを探しあてることでしたね。この本では、情報がありそうな紙の本なりデータベースを芋づる式にたどっていくしか方法がなかったので。あと、古い新聞とか週刊誌のマイクロを見るのにかなり労力を取られました。

南陀楼　「ありそうな」っていうのはどこまでわかってるんですか。

栗原　それらしい記述のある資料を片っ端から見ていくしかないですよね。この本でいうといちばん大変だったのは倉橋由美子の章で、手がかりが全然見つからなかった。決め手になったのは『ユリイカ』の倉橋特集ですが、「東京新聞　9月」というアバウトな情報が1行あっただけでした。東京新聞は縮刷版がないので、マイクロフィルムをひたすらぐるぐると見ていく。そうすると別の情報が見つかって、それがまたマイクロだったりする。必要な情報が見つかっても、うっかりメモを取り忘れると、またイチから見るわけです。そしてメモをなくしちゃったりして（笑）。

南陀楼　雑誌記事索引にキーワードを入れてヒットするものは結構ありました？

栗原　ほとんどないです。タイトルだけで情報を

栗原　裕一郎（くりはら　ゆういちろう）
1965年神奈川県生まれ。
著書に『<盗作>の文学史』（新曜社　2008）『バンド臨終図巻』（河出書房新社　2010）『村上春樹を音楽で読み解く』（日本文芸社　2010）など。『〈盗作〉の文学史』で第62回日本推理作家協会賞受賞。
ブログ「おまえにハートブレイク☆オーバードライブ」（http://d.hatena.ne.jp/ykurihara/）
Twitterアカウント　y_kurihara

集めるのは無理ですね。

南陀楼　雑誌の目次では、文芸時評で取り上げる著者や書名は出てないことが多いですからね。

栗原　本文検索ができないとどうにも。こちらは一つの記事のほんの一部分の情報がほしいわけで、そうすると結局現物を見ていくしかない。あとは昔の匿名の批評が調べにくいですよね。東京新聞の「大波小波」はまだましで、ほかはなんとも……。

南陀楼　なかなか本にまとまってないですからね。「大波小波」も抜粋が単行本になっただけで[1]。

柴野　『書棚と平台』を書く上でいちばん役に立ったのは、国会図書館にある出版関係の業界誌でしたね。ほかの図書館にはあまりないので。日配という戦時中の取次会社が出していた月報とか、中央公論社が戦前から出している『書店はんじょう』[2]という書店向けのPR誌を利用しました。『書店はんじょう』は、戦前のものは中央公論社にもないんですが、昭和30年代から休刊までは国会図書館に揃っています。これを見ると、幸田文全集が出たときに、たくさん売った書店に、全集の装丁に使われた、有名な「幸田格子」の反物プレゼントキャンペーンとか、面白い記事がいっぱい載っているんです。古い出版人の座談会なども出ていて参考になります。

南陀楼　そういう資料は（日本）出版クラブなどにはないんですか。

柴野　『学燈』のようにメジャーなものはほかにもありますが、内部向けのものはほとんどないですね。

小島　内部向けのものは、最近は個人情報保護ということで図書館では集めにくくなってきています。

南陀楼　ぼくは大学に入った年の4月に初めて国会図書館に行ったんですよ。そのときはカード目録を見ただけで、どうすれば本が見られるかもわからなかった。そのあと復刻版を出す出版社でアルバイトしてたときに、自分で企画を出して、宮武外骨の雑誌を全部復刻するシリーズ[3]をつく

りました。このとき、参考文献目録、宮武外骨について書かれた文献の書誌をつくったんですが、探し出すと無限にあるんですよね。マイナーな雑誌の無署名記事もあって。最初は主要なものだけでいいやと言ってたのが、集め出すと面白くなっちゃって。たとえば昭和のはじめに長尾折三（藻城）という外骨の友人が出していた『医文学』[4]という雑誌があるんです。基本的には医学の雑誌ですが文学の話もあって、外骨に関する記事がいっぱい載っている。この雑誌は創刊から廃刊まで国会図書館で見ました。あと外骨は、『世の中』[5]『夢の世界』[6]とかゴシップ雑誌みたいなものでもよく取り上げられているんですね。一つの雑誌を見ると芋づる式に次々と別の雑誌が見つかって、全部で800点以上集まった。このときは国会図書館の資料をずいぶん使いました。当時は請求すると1時間くらい待ちました。その間に参考図書室[7]でほかの図書館の目録や書誌を見てたんですが、このときにいろんなネタが拾えました。

小林　『医文学』ではありませんが、文学関係の調べものは、文学の資料だけ見ていても足りない場合が多いですね。たとえば明治初期のある書き手について知りたいというときに、著作権台帳を見てもいいんですが、ちょっとひねって漢学者の総覧を見てみるとか。違うジャンルにずらしていくと面白いものが見つかることがあります。

柴野　京子（しばの　きょうこ）
1962年東京都生まれ。
東京出版販売株式会社（現株式会社トーハン）勤務を経て、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター特任助教。相模女子大学非常勤講師。著書に『書棚と平台　出版流通というメディア』（弘文堂2009）。『書棚と平台』で第31回日本出版学会賞奨励賞受賞。

1　小田切進編『大波小波　匿名批評にみる昭和文学史』　全4巻　東京新聞出版局　1979.4-9　＜請求記号　KG322-323＞
2　『書店はんじょう』中央公論社　＜請求記号　Z21-94＞　所蔵：昭和30年2月～昭和49年2月（欠号：153号、22巻7号）
3　『宮武外骨此中にあり　雑誌集成』　全26巻　ゆまに書房　1993-1995　＜請求記号　US21-E67＞
4　『医文学』医文学社　＜請求記号　雑27-36＞　所蔵：1巻1号（大正14年8月）～12巻5号（昭和11年5月）『メヂチーネル』（～大正6年）、『医学及医政』（～大正14年）から改題
5　『世の中』　実業之世界社　＜請求記号　雑54-79＞　所蔵：2巻4号～3巻6号（大正5年4月～大正6年6月）
6　『夢の世界』　安福通信社　＜マイクロフィッシュ請求記号　YA5-1027＞　1巻1号（大正7年4月）～2巻10号（大正8年10月）欠号：2巻3号
7　東京本館にあり、人文・社会科学分野の参考図書を置いていた。平成14年3月に閉室。現在は科学技術経済情報室と人文総合情報室に分かれている。

国立国会図書館に思うこと

南陀楼　以前は、図書館学資料室[8]で出版関係の雑誌を手に取って見られるのが便利でした。当時、請求は16時までだったけど、今はこんな長い時間開館するようになりましたね[9]。

栗原　24時間開けてほしい（笑）。

南陀楼　あと請求がオンラインでできるので便利になった。1998年にロンドンの英国図書館に行ったとき、机の上に端末があって、それで請求できるのがすごくよかった。国会図書館でもオンラインになったときは、感激した覚えがあります。ただパソコンに慣れていない人はつらいでしょうね。前の参考図書室がよかったのは、いろんなジャンルの事典と一緒にほかの図書館の目録もあったところですね。国会図書館で見つからないものがどこにあるのか見当がつけられる。ぼくは大宅壮一文庫はほとんど使っていないんですが、あそこの紙の目録はよく見ていたんですよ。

栗原　大宅文庫は出納が速いんですよね。閉館間際に駆け込んで50冊だーっと見るとかできちゃう。国会図書館とか（東京）都立中央図書館ではそれは不可能に近い。コピーも速いし。

南陀楼　あと原本をほとんど合本してないでしょう。それが大きいんじゃないですか。国会図書館は合本してあるから、真ん中の部分がコピーしにくいし、厚い雑誌だと合本1冊に2号分しか入っていなかったりして、たくさん見るのに時間がかかる。

栗原　1回に請求できる冊数をもうすこし増やしてほしいですね。

柴野　雑誌のどの号に必要な情報があるかわからないから、見当をつけて請求したものが全部必要なかったということが結構ありますね。私は学内の図書館の書庫に入れるので、そこで間に合うものもありますが。

栗原　使い勝手といえば、単行本と雑誌の窓口が分かれてるのが結構きついんですよね。

柴野　うまく時間を配分しないといけないですよね。

栗原　単行本も雑誌も両方請求すると、本館と新館を資料抱えて移動しなきゃいけない。

南陀楼　でも慣れてくると、そのきつさが快感になってくる（笑）。以前のシステムでも、早く終わらせることに血道をあげてたから、1日に30～40冊見て、コピーが間に合わないものは後日複写に回したりしてましたよ。

柴野　それはすごい。

そもそも、どういうものが「雑誌」に当たるのかということからしてよくわからないですよね。

小島　管理のために区分する必要があるので、国会図書館では一応「同一標題の下に巻次、年月次

を追って継続発行する意図があり、かつ、完結を予測できない刊行物」のうち、年に1回以上刊行されるものを雑誌としていますが、いろいろ変遷しています。あと、雑誌のタイトルで出ていても、独自の巻号をもっていないと単行本扱いになります。

栗原　そういえば、ムックって雑誌じゃないんですか？　雑誌の別冊でいろんなバンドのインタビューが載っているものが、国会図書館では単行本扱いで、ひとつのインタビューの半分までしかコピーできない、コピーするならそのバンドのメンバー全員の許諾を取るようにと言われて。

小島　ムックは単行本として扱っています。そのほうが目録に個別のタイトルが入るということで。単行本で分担執筆とみなされる場合は、コピーは個々の部分の半分までとしていますね。

南陀楼　ムックは流通上は雑誌ですよね。

南陀楼　綾繁（なんだろう　あやしげ）
1967年島根県生まれ。本名 河上進。
ゆまに書房勤務を経て、1997年『季刊・本とコンピュータ』（トランスアート）創刊スタッフ、のちに編集長。和光大学非常勤講師。
著書に『ミニコミ魂』（晶文社　1999）『ナンダロウアヤシゲな日々』（無明舎出版 2004）『一箱古本市の歩きかた』（光文社 2009）『老舗の流儀　戦後六十年あの本の新聞広告』（幻冬舎メディアコンサルティング 2009）など。
ブログ「ナンダロウアヤシゲな日々」
（http://d.hatena.ne.jp/kawasusu/）

雑誌のデジタル化

南陀楼　最近、国会図書館に行けばなんとかなると思って行ってみると、デジタル化で利用できないことが多いですね。請求した半分が使えなかったこともありました。

栗原　デジタル化はいつごろ完了するんですか？

小島　現在の作業が完了するのは、2011年の3月末の予定です。そのデジタルデータが利用できるようになるのは夏ごろです。

栗原　この1年ちょっとしんどいですね。

南陀楼　今度のデジタル化は、著作権が切れたものだけなんですか？

小島　著作権の有無にかかわらずやっていますが[10]、著作権のあるものの閲覧は館内限定です。

8　東京本館にあり、図書館や出版関係の図書・雑誌等を置いていた。平成14年3月に閉室。
9　現在、東京本館の開館時間は9:30～19:00、資料請求は9:30～18:00。資料により利用できる時間は異なる。詳細は国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞利用案内参照。
10　平成21年6月に著作権法が改正され（平成22年1月施行）、国立国会図書館では、資料の滅失、損傷、汚損を避けるため、著作権者の許諾を得ることなくデジタル化を行うことが可能となった。

雑誌だけで今のところ1万2千タイトルくらいですね。

柴野　館内の端末を相当増やさないといけませんね。

栗原　電子化されたマイクロフィッシュを見るような感じですかね……。

柴野　マイクロよりは見やすくなりますか？　さくさくページがめくれるといいんですが。

小島　閲覧する環境はいまシステムをつくっているところなんですが、カラーなのでマイクロよりは見やすいかと思います。拡大もできます。

柴野　テキスト・データはつくんですか？

小島　目次のテキストはつきます。

南陀楼　目次情報からその記事に飛べるんですか？

小島　検討中です。

柴野　「近代デジタルライブラリー」[11]みたいな感じになるんでしょうね。

南陀楼　デジタル化した原本は関西館に行っちゃうんですか？

小島　今のところその予定です。

南陀楼　そうすると、紙をめくっていくことで得られるぱっと見の情報――だいたいこのへんに書いてあったとか、そういう情報や手ざわり的なものは得られなくなるわけですか。うーん。いま、原本が見られる図書館がどんどん少なくなってますね。図書館で調べ物しようというときに、どこに行くか、決め手が少なくなってる。

柴野　都立中央図書館もリニューアルして様子が変わってしまったのが残念です。

栗原　全文のテキスト･データはつくらないんですか？

小島　雑誌ではその予定はありません。図書の一部は今実験していますが。

栗原　テキスト・データはつけてほしいなあ。電子化かまびすしい昨今ですが、最終的にはテキスト化して持ってるところが残るんじゃないでしょうか。

柴野　絶対に必要になりますよ。

小島　日本語はOCRで読み取るのが難しいです。昔のものだと異体字や旧字がありますから、さらに大変です。

柴野　東京大学の知の構造化センターで、岩波書店の戦前の『思想』をデジタルテキストで構造化するという実験プロジェクトがあります。OCRの精度も98%ぐらいまでいっているんですが、文字や表記に揺れがあったり、特殊な記号があったりして、100%にはなかなかならないです。

南陀楼　校閲は人間がやらなきゃいけないですもんね。戦前の仮名遣いを活かした検索が必要だし。

柴野　ウィキペディアみたいに、みんなでつくっていくしかないんじゃないかと言っているんですが。

南陀楼　「青空文庫」がテキスト化のノウハウを公開していますね[12]。明治期の表記、たとえば踊

り字をどう処理するかとか。参考になるんじゃないですか。

雑誌を探す

小林　従来図書館界では、雑誌の扱いが図書に比べて軽かったんですよね。

南陀楼　大学図書館で、合本するときに表紙を外しちゃう場合がありますね。そういうときに、雑誌は軽く見られてるのかなと思います。ノンブルが通しになっていて合本することを前提にしている雑誌もありますけど、文学雑誌とか美術雑誌の表紙がないと、肝心なところが見られない。

小林　合本したために縁にあった編集人の名前が見えなくなって、どうやって調べればよいかと聞かれることもあります。そういう場合は、原装で保存しているところでないとわからないんですよね。

南陀楼　そうなると古本屋の即売会なんかで入手することになりますが、探しているものが市場に出るかという問題がありますよね。

戦前でもガリ版でつくった個人誌がすごくたくさん出てるけど、国会図書館のOPAC見ても出てこないですね。流通に乗らないものを調べるときは、国会図書館はあまり使えない。ほかの図書館にもほとんどないんですが、早稲田大学図書館の西垣文庫[13]にはたくさんあるんですよね。

小島　国会図書館でも、OPACで検索できるもの以外に、たとえば憲政資料室のプランゲ文庫[14]の中に雑誌が入っている場合があります。プランゲ文庫は昭和20年代前半のものを調べる際に有効です。

柴野　国会図書館は地方の出版物も弱いですよね。それはそれで、地域の図書館がきちんと集めていればいいと思うんです。そしてその所在がわかるネットワークができていれば。そうでないと、世の中から存在しないもののように思われてしまうので。こうしている間にも新しい雑誌がどんどんできているかもしれない（笑）。

南陀楼　全国の図書館の雑誌を横断検索する手段ってないんですか。

小林　公共図書館では、雑誌の総合目録は今のところないんですよね。大学図書館の総合目録は国立情報学研究所のWebcat[15]がありますが、入っ

11　国立国会図書館が所蔵する、明治から大正期の和図書の画像データベース。国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞電子図書館＞近代デジタルライブラリー（http://kindai.da.ndl.go.jp/）

12　「青空文庫工作員作業マニュアル」http://www.aozora.gr.jp/KOSAKU/MANU_MOKU.html

13　西垣武一氏（1901-1967　元新聞資料協会会長、広告会社社長）が収集したコレクション。

14　プランゲ文庫の新聞・雑誌記事の検索手段として、早稲田大学政治経済学部の山本武利教授により構築された「占領期新聞・雑誌情報データベース」（http://m20thdb.jp/）がある。利用には登録が必要（無料）。

15　http://webcatplus.nii.ac.jp/

ていないところもあります。それに、大学は学術誌がメインなので、一般誌の所蔵を一括して調べる手段はないですね。昔国会図書館が総合目録をつくろうとしたことがあったんですが[16]。あとは雑誌をたくさん持っている図書館を把握しておいて、その目録に直接あたる方法があります。三康図書館、昭和女子大学図書館、婦人雑誌だったらお茶の水図書館、ちょっと意外なところでは成田山仏教図書館とか。

柴野　宗教団体の図書館は結構よい蔵書を持ってますね。

南陀楼　早稲田の図書館もたくさん雑誌を持ってるんだけど、かなりマイクロに置き替わったり、本庄キャンパスなんかに分散し始めちゃいました。早稲田は演劇博物館が意外に珍しい雑誌を持っていますね。

柴野　東大の明治新聞雑誌文庫も充実してます。ただ、東大は資料が学部や研究所に細かく分散していて、それぞれ手続きが違うのが難点です。

南陀楼　今度公開された「国立国会図書館サーチ」には、ほかの図書館の情報も入るんですか。

小林　今のところ「リサーチ・ナビ」[17]という別のシステムで、調べもの用のリンク集を出す予定です。

南陀楼　雑誌の追悼号の情報をまとめた冊子を発行している古書愛好家がいらっしゃいますが[18]、個人でこういう資料を発行している人って、けっこう多いですよね。いろんな本の序文を集めた目録とか、ある雑誌の特定の号のすごく詳しい索引とか。そういった奇特な個人の仕事を援用できるようにしてほしい。

小林　図書館の目録では、そういう情報が抜け落ちてしまいがちですね。とくに雑誌の特集号の情報って従来の図書館目録では引っかかってこないので、なんとかして合理的に検索する手段はできないものか考えているんですが。

南陀楼　今までは雑誌の総目次が出ている号を見ていくしかなかったけど、最近はいろいろなデータベースができて楽になりました。戦前のものはまだあまり入っていませんが。あと復刻版が出ると索引がつきますよね。ただ、出版社によって索引づくりのレベルに差があるのが問題です。

小林　そうですね。雑誌でも単行本でも、索引のあるなしで使い勝手が全然違いますね。図書館では、索引がついていると、レファレンス・ブックとして使えるから買おうということになったりします。

柴野　索引の意義は大きいですよね。

栗原　でも索引はね……。

南陀楼　そりゃ大変ですよ。

柴野　作れって言われても……（笑）。

南陀楼　偏執狂的な編集者が一人いないとだめなんですよね。

栗原　編集者しだいってとこがありますね。

南陀楼　個人や出版社の出した目次や索引を、国会図書館で一括して検索できるといいですね。

雑誌を残す

小林　ところで、戦前期の雑誌の場合、国立国会図書館が持っているのは流通していたうち3割くらいではないかということです[19]。今でも、個人が出している趣味の雑誌や同人誌を探すのは難しいですね。

南陀楼　ただ、書物に関する雑誌は、戦前のものでも、帝国図書館の職員がかかわっていたり、図書館をよく使っている人が発行したりした事情からか、かなり集まっていますね。斎藤昌三などの愛書家が出してる雑誌はほとんど入ってます。発行者の意識が違うんでしょうね。

栗原　自分がミニコミを発行したとしても、国会図書館に納本するって発想はなかったなあ。きょうからは違いますけどね（笑）。南陀楼さんは、なんで自分のミニコミ入れないの。

南陀楼　ああ……出す側として、自分の出してるものが国会図書館に置かれるっていう発想はなかったですね。探す側としてはミニコミでもなんでも置いておいてほしいと思うけど。

栗原　今から入れればいいじゃない。

柴野　バックナンバーを送っていただいて。

南陀楼　さかのぼってもいいんですか。

小島　はい、ぜひお待ちしています。きょうはありがとうございました。

（2010年11月26日　国立国会図書館東京本館）

---

16 『全国公共図書館逐次刊行物総合目録』第1巻～第6巻 1963-1968（第1巻近畿編、第2巻東海北陸編、第3巻関東編、第4巻中国編・四国編、第5巻北日本編、第6巻九州編）

17 調べものに便利な情報を集めたサービス。国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞調べ方案内＞リサーチ・ナビ（http://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/）

18 かわじもとたか『追悼号書目　古書目録にみた追悼号書誌』

19 田中久徳「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐって」『参考書誌研究』（36） 1989.8 pp.1-21 http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/36-03.pdf 『雑誌年鑑』（日本読書新聞社　昭和14（1939）年）に掲載されている「雑誌目録」のそれぞれのタイトルについて、国立国会図書館の所蔵状況を調査している。

国立国会図書館の雑誌

はじめに

図書館では一般に、雑誌や新聞などの定期刊行物を「逐次刊行物」と呼びます。国立国会図書館では逐次刊行物を「同一標題の下に巻次、年月次を追って継続発行する意図があり、かつ、完結を予測できない刊行物」（国立国会図書館資料管理事務取扱細則）で年1回以上刊行されるものと定義しています。このうち、①大きさが36cm以上、②折っただけで綴じがない、③表紙にも記事があり、表紙と本文が同一紙質、という3条件をすべて満たしたものを新聞、それ以外を雑誌として扱います。ただし、資料の区分はその時々によっ

て多少の変動があり、例えば、年報・年鑑類は、1986(昭和61)年以降の受入分から雑誌として扱っています（それまでは図書（単行書）扱い)。

このような事情から、国立国会図書館には雑誌がどのくらいあるのかという質問に正確に答えることは非常に難しいのです。また、同じ雑誌でも、原本のほかに複刻版、大活字版など別の版が存在したり、マイクロフィルムに媒体変換されていたり、さらに昨今ではデジタル版が現れています。なお、平成21年度末現在の所蔵統計で見ると、約3,700万点の資料のうち、雑誌は25%、新聞もあわせた逐次刊行物が37%を占めています(図1)[1]。国内で刊行された雑誌約600万冊、外国で刊行された雑誌約330万冊、合計約930万冊の雑誌を所蔵しています（下表)。日本語の雑誌が約15万タイトル、外国語の雑誌が約6万4千タイトルあります（うちアジア諸言語の雑誌約8千タイトル)。

1 ただし、この統計ではデジタル版の雑誌・新聞が「非図書」に含まれる。

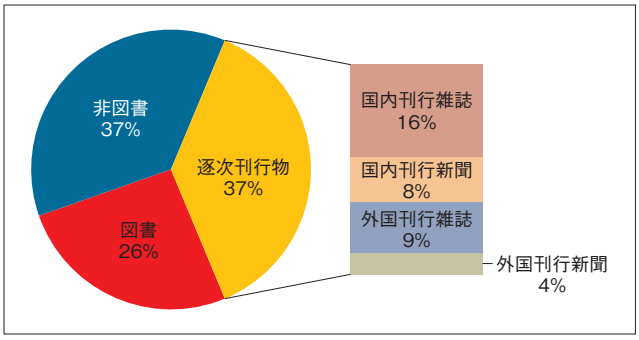


図1　蔵書の総点数における逐次刊行物の比率（平成21年度）

	所蔵数	受入数
雑誌　計	9,307,722	405,678
国内刊行雑誌	6,033,945	292,605
外国刊行雑誌	3,273,777	113,073

雑誌の所蔵・年間受入冊数（平成21年度）
(「平成21年度　図書館資料受入・所蔵統計」『国立国会図書館年報　平成21年度』から)

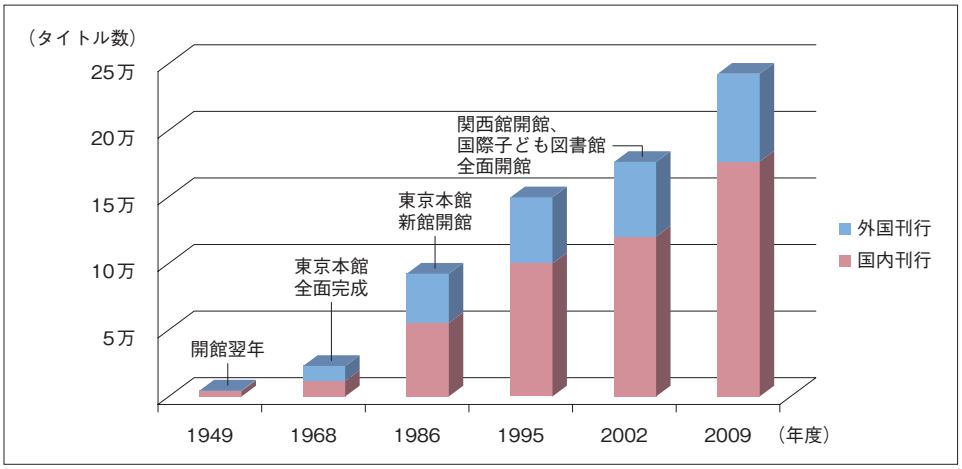


図2　逐次刊行物（雑誌・新聞）の所蔵タイトル数の変遷　＊1949年度の区分は邦字／外字、2009年度の数は書誌データ数

1　雑誌はどのように集められているか

(1) 国内の雑誌

国立国会図書館の雑誌コレクションは、明治期から昭和前期までの帝国議会貴族院・衆議院および帝国図書館[2]の旧蔵書、機関・個人から寄贈あるいは購入したコレクションと国立国会図書館成立以後に収集したものからなります。

帝国図書館には、明治8（1875）年の新聞紙条例（明治42（1909）年に新聞紙法に引き継がれる）による検閲に使われた雑誌が内務省から交付（移管）されていましたが、雑誌の交付は途中で停止となり、必要な雑誌や新聞の大半は購入や寄贈によって収集されていました[3]。しかし、明治から昭和前期には雑誌・新聞が急速に増加しており、対応が追いつかなかったようです。昭和13(1938)年時点で流通していた主要な雑誌について、帝国図書館の所蔵率を3割程度であるとする研究もありますが[4]、それでも4千タイトル以上の雑誌が国立国会図書館に残されています。

昭和23（1948）年、国立国会図書館が設立され、国内の出版物を国立国会図書館に納めることを義務づける納本制度が始まりましたが、制度が軌道に乗るまでには少し時間がかかり、この時期の出版物は所蔵していないものが多いとみられます。いっぽう、昭和20（1945）年から昭和24（1949）年にかけて、国内の出版物は占領軍の検閲を受けていました。検閲を受けた出版物は、東京本館憲政資料室で「プランゲ文庫」として閲覧することができます。プランゲ文庫とは、占領軍の歴史部門に修史官として勤務した米国メリーランド大学歴史学教授のプランゲ（Gordon W. Prange）が、それらの出版物の価値に着目し、検閲の終了後にメリーランド大学に移管させたものです。国立国会図書館は、平成4年からプランゲ文庫のマイクロフィルム化・デジタル化に取り組んでいます。プランゲ文庫の雑誌のマイクロフィッシュには、当時の雑誌（全国各地のミニコミ誌等を含む）約1万3,800タイトル[5]が収録されています。

その後、納本制度に関する種々の取組みを行い、安定的な収集が行われるようになりました。

最近は前述のように、雑誌の復刻版がCD-ROMで刊行されたり、紙媒体での発行からインターネットを通じた提供に移行したり、さらに

---

2 ここでは、帝国図書館の前身・後身の図書館も含めて「帝国図書館」と総称する。
明治5（1872）年　文部省博物局の管轄で書籍館として設置される（翌年、太政官正院博覧会事務局に合併）
明治8（1875）年　再び文部省の所管となり、東京書籍館となる
明治10（1877）年　文部省から東京府が引き継ぎ、東京府書籍館となる
明治13（1880）年　再び文部省の所管となり、東京図書館となる
明治18（1885）年　東京教育博物館と合併し、上野公園内に移転
明治22（1889）年　同博物館と分離
明治30（1897）年　帝国図書館となる
昭和22（1947）年　国立図書館となる
昭和24（1949）年　国立国会図書館支部上野図書館となる
3 田中久徳「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐって　『雑誌』メディアと納本制度」『参考書誌研究』(36) 1989.8　pp. 1-21（http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/36-03.pdf）
4 上掲（注3）
5 NDL-OPACの「プランゲ文庫の検索・申込み」メニューで検索が可能。

帝国図書館の旧蔵書から

『印刷雑誌』

東京　印刷雑誌社　＜請求記号　雑35-250＞
所蔵:1巻1号（明治24年2月）～19巻11号（明治42年11月）

秀英舎（後の大日本印刷）の創業者である佐久間貞一が発行責任者、義兄の保田久成が主筆を務めた初代『印刷雑誌』は、印刷技術の研究と業界の啓蒙を目的として明治24（1892）年2月に創刊されました。欧米の最新の印刷技術を論文や口絵で紹介し、明治43（1911）年4月号まで刊行されて、同年8月からは『印刷世界』（国立国会図書館では未所蔵）に引き継がれました。現在の『印刷雑誌』は、『印刷世界』廃刊後の大正7（1919）年5月に新たに創刊されたものです。

より深く知るために
●中原雄太郎ほか監修、印刷学会出版部編『『印刷雑誌』とその時代　実況・印刷の近現代史』印刷学会出版部　2007　＜請求記号UE82-J1＞

『中日文化』

南京　中日文化協会　＜請求記号　雑56-99＞
所蔵：1巻1号（昭和16（1941）年3月）～1巻3号（昭和16年11月）

中日文化協会は、南京を拠点とする汪兆銘政権により、日本との文化面での交流を企図して1940年に設立された団体です。中国各地に分会が設置され、とくに上海分会は武田泰淳の小説『上海の蛍』のモデルとなったことで知られます。表紙に「日文版」とあり、中国語版（国立国会図書館では未所蔵）も同時発行されていたことがうかがえます。

より深く知るために
●趙夢雲「『中日文化協会』に関する初歩的な考察 上海分会を中心に」『植民地文化研究』(4) 2005　pp. 225-254　＜請求記号　Z71-H398＞
●杉野元子「南京中日文化協会と張資平」『芸文研究』(87) 2004　pp. 255-277　＜請求記号Z12-185＞

メールマガジンなど、多様なデジタル版雑誌が現れてきました。平成12年には、CD-ROMなど有形の媒体をもつパッケージ系出版物が納本制度の対象となりました。ネットワーク上に存在する情報については、平成22年4月から国等の公的機関のインターネット情報の収集を開始しました。また、同年6月には、出版物に相当するような、民間の電子書籍・電子雑誌などのオンライン資料についても国立国会図書館が収集するべきであるとの納本制度審議会の答申が出されています[6]。

(2) 外国の雑誌

国立国会図書館は、収集方針に基づいて、外国で刊行される雑誌を選択的に収集しています。外国の出版物の収集は、購入のほか、外国の図書館、研究機関との出版物の交換（国際交換）、寄託・寄贈によります。アジア言語を含むほとんどの外国雑誌は、関西館で所蔵しています[7]。また、平成14年から電子ジャーナルを導入し、東京本館および関西館で、平成22年12月末現在約2万6千タイトルを利用することができます。

電子ジャーナルは館内の端末で利用する

国立国会図書館は、我が国における科学技術情報の基盤整備の一環として、外国の科学技術雑誌を重点的に収集してきました。科学技術雑誌の収集は、昭和28（1953）年、湯川秀樹博士をはじめとする専門家の助言に基づいて世界各国の原子力関係機関に協力を依頼し、科学技術関係の学術雑誌を収集したことに始まります。以来、コレクションを構築してきましたが、近年の外国雑誌および電子ジャーナルの価格高騰の影響から、冊子体の雑誌の購入は減っています。限られた予算の中で、電子ジャーナルと冊子体のバランスを考慮して必要な情報を提供していくことが現在の課題です。

(3) 児童雑誌

平成12年に国際子ども図書館が設立され、児童書専門図書館として国内外の児童書と関連資料を広く収集・保存・提供しています。国立国会図書館では、主たる読者がおおむね18歳以下のものを児童雑誌として扱っています（ただし、マンガ雑誌はほとんどが東京本館にあります）。明治から昭和前期に刊行された児童雑誌は未所蔵のものが多く、現在収集に努めています。これらは前述のプランゲ文庫に収録されていることもあります。

2　図書館資料としての雑誌

雑誌は、単行本とは異なり、創刊後も、タイトルや刊行頻度の変更、別の雑誌との合併（あるいは二つの雑誌への分離）、さらに休刊、廃刊、復刊などさまざまに変化します。この変化に対応して、雑誌の書誌データは常に更新されています。蔵書目録であるNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）[8]では、改題や分離・合併などの関係をもつ雑誌の書誌データは、検索の便を考慮して簡単に参照できるようにしています。

もうひとつ雑誌と単行本の異なる点は、個々の号が散逸しないよう、書庫内の同じ場所に保管スペースを確保する必要があることです。国立国会図書館では、刊行頻度などを勘案して保管スペースを計算し、書庫を計画的に使用しています。

合冊製本された資料

また、雑誌には酸性紙という劣化しやすい紙が使用されている割合が多く、さらに簡易なつくりで壊れやすいものが多いため、損傷を防ぎ、個々の号が散逸しないよう合冊製本して保存しています（厚みのあるもの等を除く）。合冊製本では、長期の利用・保存に耐えられるようしっかりした表紙をつけ、背にタイトルをはっきり表示することで、書棚から資料を探しやすくしています。

表紙の部分が取れかかったホチキス止めの雑誌

6 納本制度審議会答申「オンライン資料の収集に関する制度の在り方について」平成22年6月7日（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/data/s_toushin_5.pdf）　納本制度審議会は、納本制度の改善、適正な運用のために設置される、国立国会図書館長の諮問機関。
7 アジア言語の一部の雑誌・新聞は、東京本館でも所蔵している。
8 http://opac.ndl.go.jp/

デジタル化作業を終えた明治期から昭和前期の雑誌

国立国会図書館における雑誌の利用形態は、この30年ほどで、複写が急激に増加しています。雑誌は劣化しやすく、さらに前述のように製本を施すため、コピー機での使用に耐えないことがあります。利用と保存の両立を図るため、昭和48（1973）年度から雑誌の媒体変換を進めてきました。媒体変換の手段はしばらくの間マイクロフィルム撮影でしたが、平成21年度におもな手段をデジタル化と定め、現在、大規模なデジタル化を進めているところです。デジタル化の対象は、昭和期～平成12年（一部明治・大正期を含む）までの雑誌のうち劣化の進んだものと「雑誌記事索引」の採録対象となっているもので、約1万2千タイトルです。デジタルデータでの提供は平成23年夏以降を予定しています。

おわりに

雑誌は発行された時代を映す鏡ともいわれます。発行方法や形態にその時々の最新技術が反映されやすく、また、当時の論説や風俗などを調べるためにもなくてはならない貴重な資料です。国立国会図書館は雑誌を末長く保存していつでも利用できるようにするため、今後もさまざまな取組みを続けていきます。

（資料提供部）

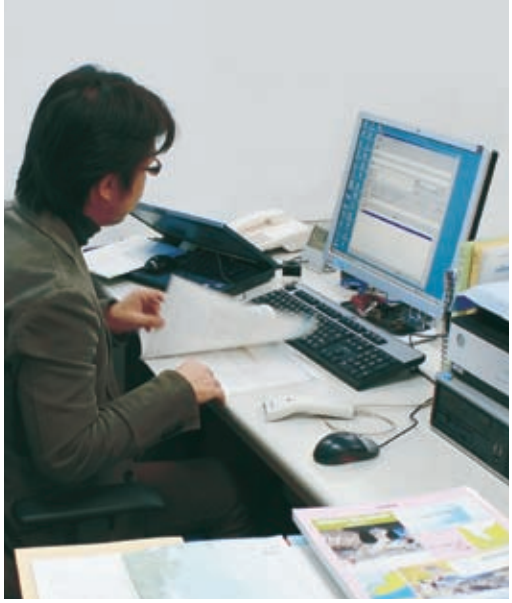
雑誌記事索引　1千万の記事・論文へつながる道

1千万件の記事や論文が検索できるって、当たり前？　ワクワク？　多い？　少ない？　2010年11月4日、60年以上かけて蓄積してきた「雑誌記事索引」の記事件数が、1千万件を超えました。

「雑誌記事索引」は、日々刊行される雑誌に掲載された記事のタイトル、著者、掲載ページ、キーワードなど、記事・論文を探すときの「目印」となる情報で、インターネット上のNDL-OPACで検索と雑誌記事の複写申込みができます。また、「雑誌記事索引」のデータは、国立情報学研究所（NII）の論文情報検索サービス「CiNii」をはじめ、国立国会図書館以外の機関でも広く利用されています。

「雑誌記事索引」は、記事・論文へつながる道路のようなものです。もし「雑誌記事索引」がなかったら、目的の記事・論文にたどりつくのにはもっと手間がかかります。私たちの仕事はその道路を整備するようなもので、地味ではありますが、大事なものだと自負しています。

ところで、2010年も日本にゆかりのある研究者がノーベル賞を受賞しました。日本の雑誌に掲載された研究者に関係のありそうな記事・論文は何があるかな？と思ったら、「雑誌記事索引」の「論題名」や「著者」の入力欄に受賞者の名前を入力して検索してみてください。『現代化学』『ファインケミカル』のような専門誌から『文藝春秋』のような一般誌、『週刊朝日』などの週刊誌まで、様々な雑誌の記事・論文が見つかります。「雑誌記事索引」の採録対象雑誌は、学術雑誌を中心とした約480誌からスタートし、その後、一般週刊誌などに範囲を拡大して、現在は約2万誌となっています（このうち現在刊行中の雑誌は約1万誌）。この幅広さこそは、「雑誌記事索引」が日本を代表する文献データベースの一つといわれる理由です。



「雑誌記事索引」が記事・論文の発見や結びつきにつながって、新たな創造物が生まれる手助けになればいいな。

（逐次刊行物・特別資料課　すたあげいざ）

図解
国立国会図書館のしごと

ISSN（国際標準逐次刊行物番号）

世界共通の雑誌の識別番号はどのように決まるか

番号の申請から

ISSNの申請を受けます

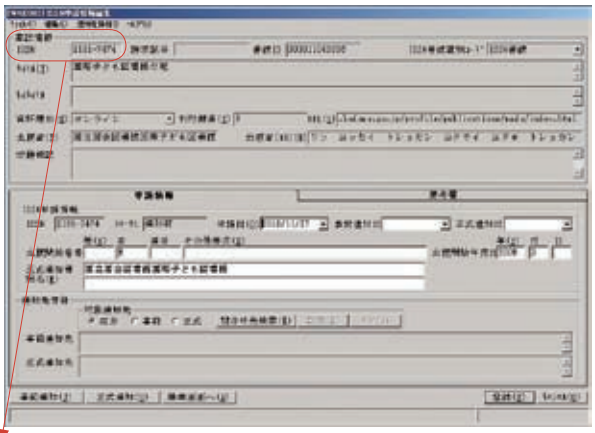
ISSNの付与は、
発行者からの申請に
基づいて行っています。

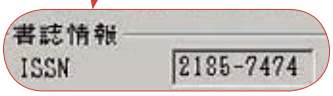
必要に応じて申請者に問い合わせることもあります。

申請書の内容を確認し、
刊行物のタイトルや発行者等を
記録します。

ISSNを発行します

館内のシステムでISSNを発番します。





番号は、国際センターから上4桁の割当てを受け、各国内センターが発行しています。逐次刊行物は数多く発行されていますが、現在のISSNの構成では、150年分以上の数字が確保されているという試算があります。

この番号を申請者にお知らせし、
刊行物に表示していただきます。
ISSNは、刊行物の表紙右上に表示することになっています。

■ どんな刊行物に付与するの？

「逐次刊行物」とは、一定のタイトルで巻号や年月表示があり、終わりを定めずに継続刊行される資料を指します。この条件を満たしていれば、紙やCD-ROMの雑誌だけではなく、電子ジャーナルも付与対象になります。

■ ISSNの構成は？

「ISSN」の表示のあと、ハイフンで区切られた8桁の数字が続きます。数字には特に意味はありません。末尾の数字は、読み取りミスを防ぐためのチェック用数字（チェックデジット）で、10を表す「X」となることもあります。この構成は、ISO（国際標準化機構）の規格で定められており（ISO3297）、日本工業規格ともなっています（JIS X 0306）。

■ ISSNを付与するメリットは？

逐次刊行物は、長期間継続して刊行されるうちに、タイトルや出版者などが揺れ動くことがあります。ISSNが付与されていれば、その発行国、発行者、言語、内容にかかわらず、刊行物を容易に識別することができます。このため、刊行物の流通や図書館等での受入れにおいて、同定する作業が迅速・正確に行えます。例えば同姓同名の別人のように同じタイトルをもつ別々の刊行物も、ISSNで識別することができます。多くの主要な図書館の蔵書目録データベースはISSNで検索することができますし、一部の電子ジャーナルのデータベースでも利用できます。

なお、ISSNは、雑誌記事索引の採録や権利付与（タイトルの独占使用、著作権等）とは連動していません。

本誌の表紙右上に小さくある「ISSN 0027-9153」。これは、雑誌・新聞などの逐次刊行物を識別するための国際的な標準番号です。日本国内で刊行される逐次刊行物へのISSNの付与は、ISSN日本センターである国立国会図書館が行っています。ISSNのしくみと付与の手続きを簡単にご紹介します。

国立国会図書館のしごとを図やチャートを使って説明します。便利なサービスや、読者のみなさんからは見えない図書館の舞台裏などを紹介していきます。

登録まで

書誌データを作成します

ISSNの付与された刊行物が納本されると、書誌データを作成します。

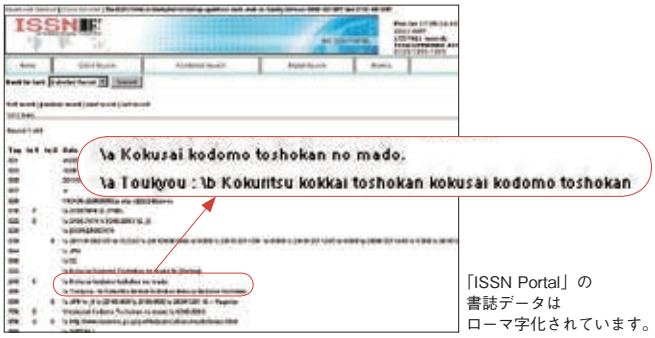
タイトル、出版者、出版年、分類等を記録します。ISSNが創刊号の刊行前に申請された場合は、ここで初めて刊行物の現物を見ることになります。

書誌データの完成後、発行者に文書で正式にISSNをお知らせします。

国際センターに書誌データを登録します

作成したデータを「ISSN Portal」に登録します。

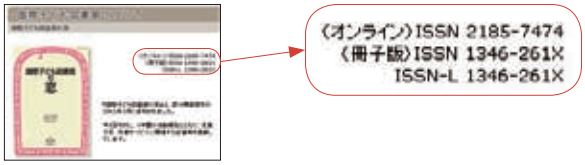
「ISSN Portal」はパリにあるISSN国際センターが維持・管理するデータベースで、ISSNが付与された全世界の逐次刊行物150万件以上の書誌データが収録されています（利用は登録制・有料）。
日本センターからは毎月、書誌データを送信しています。
一度ISSNを付与した後も、刊行物に変更があれば国際センターの書誌データを修正します。
変更の内容によっては、新しいISSNが必要となります。



「ISSN Portal」の書誌データはローマ字化されています。

■ Linking ISSN （ISSN-L）

同じ雑誌が紙版とデジタル版など異なる媒体で発行される場合は、ISSNは別々になりますが、共通の番号であるISSN-Lが付与されます。ISSN-Lは、ある雑誌を媒体を問わず探すような場合に有効です。現在NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）では、電子ジャーナルは検索できませんが、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）のISSN日本センターのページで、ISSN-Lを含む電子ジャーナルの書誌データをTSVファイルで提供しています（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/issn_02.html#onlinej）。



■ ISSNを申請するには？

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞国立国会図書館について ＞ ISSN日本センター（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/issn.html）に手続きの詳細と申請書を掲載しています。申請・登録は無料です。

（収集書誌部逐次刊行物・特別資料課）

言葉のエッセイ　第2回　動詞のいろいろ

国語の文法の時間に習ったことと思うが、日本語には不規則動詞として「する」「来る」というものがある。この動詞は、よく使う動詞である。よく使う動詞ほど、どの言語でも不規則に変化する傾向にある。

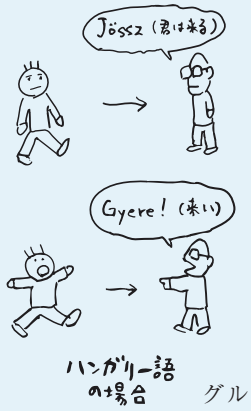
英語を考えてみれば、思い当たる節があるだろう。「do」の過去形は「doed」ではなく「did」であり、「come」の過去形は、「comed」ではなく「came」である。be動詞に至っては、恐ろしいまでに不規則であることはご承知のとおりである。

イタリア語の「行く」に当たる動詞「andare」の現在形の人称変化は、「vado」「vai」「va」「andiamo」「andate」「vanno」とおよそ予想のつかない形をとる。グルジア語の「来る」に当たる「მოსვლა（モスヴラ）」は、1人称単数だけとっても、現在形は「მოვდივარ（モヴディヴァル）」、未来形は「მოვალ（モヴァル）」、過去形は「მოვედი（モヴェディ）」と千変万化である。

人称変化は、通常6種類覚えればよいというのが大体の相場であるが、ハンガリー語の場合はそうはいかない。目的語が特定されているか否かで、動詞の活用形が変わる。特定されている場合は「特定活用」、特定されていない場合は「不特定活用」をする。つまり、12種類覚えなければならないわけである。

また、ハンガリー語の動詞の特徴として、ドイツ語でおなじみの分離動詞というものがある。分離動詞とは、活用等の結果、前綴りと本体の動詞が分離する動詞のことである。ハンガリー語の場合は、分離された前綴りが動詞のすぐ後ろに来るのでまだいいが、ドイツ語の場合は、文末に持って来られるから始末が悪い。最後まで聞かないと何の動詞かわからないという非常に奇妙な現象が起きることになる。

動詞の辞書形（辞書の見出しに使われる形）は、不定形であることが多い。しかし、例外も多い。例えば、ハンガリー語の辞書形は3人称単数現在の活用形であり、現代ギリシャ語では、1人称単数現在の活用形である。一番恐ろしいのはグルジア語である。グルジア語の動詞の辞書形は動名詞であるが、動名詞は未来形を基に作ることになっている。しかも、その未来形は現在形に接頭辞をつけることで作られる。接頭辞は動詞によってまちまちであるため、グルジア語の動詞の現在形からは、その動詞がどの接頭辞をとるか知っていない限り、辞書を引くことができないのである（すべての動詞にあてはまるわけではない）。



このように未来形が重要となるため、グルジア語の学習では、比較的早い時期に未来形を勉強することになる。未来志向のグルジア語に対して、過去志向なのがペルシャ語である。ペルシャ語の動詞の辞書形は過去語幹からできているため、ペルシャ語の学習は、過去形から進めるのが一般的である。現在形は現在形で、現在語幹というものから作ることになっている。

動詞の活用は、語学において厄介なものの一つである。こんな厄介なものを避けて通りたいと思う人にうってつけなのは、中国語である。未来であろうが、過去であろうが、微動だにしないところがすごい。

（ゴガク・マニアシュヴィリ）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

新潟県中越大震災と史料保存（1）

長岡市立中央図書館文書資料室の試み
（長岡市史双書　no. 48）

長岡市立中央図書館文書資料室編、長岡市立中央図書館文書資料室・長岡市刊
〒940-0065　長岡市坂之上町3-1-20
2009.3　223頁　26 cm　　＜請求記号　UL755-J12＞

新潟県中越大震災が発生したのは平成16年10月23日（土）であった。マグニチュード6.8、震度7～6弱、何日も余震が続く大惨事であったことは記憶に新しい。

本書は同大震災（正式名称は「平成16年（2004年）新潟県中越地震」）の発生から現在に至るまでの、長岡市立中央図書館文書資料室（以下、資料室）による被災資料の救済、避難場所等で配布されていたビラをはじめとする震災関連資料（災害アーカイブス）の収集･整理などの活動記録であると同時に、広報資料、行政資料、被災資料の解題（一部翻刻あり）、関連参考文献を収録した資料集でもある。

資料室は大正7（1918）年、長岡市で最初の公立図書館として開館した互尊文庫の2階にあり、中央図書館の一部として、主に歴史的資料の収集、整理、公開を行っている施設である。文書館や中央図書館の被災が軽微だったこともあり、地震発生の10日後という早い段階で資料の救済活動を開始することができた。被災者の生活再建の目途がたっていない段階での救済活動は、被災者への配慮を欠くのではないかという「とまどい」があり、それを乗り越えての活動だったようだ。救済活動に職員を突き動かしたもの、結果的に市民に受け入れられた要因としては、長岡市が戊辰戦争や太平洋戦争の空襲によって歴史資料が失われた地域であること、阪神・淡路大震災以後の被災資料救出活動の経験、蓄積、ネットワークの存在も挙げられよう。

救済活動に参加したボランティアの手記、アンケート結果などからは「図書館にお世話になっている」「恩恵を受けている」から「少しでも役に立ちたい」という声があり、市民に溶け込んだ活動になっていることが語られている。

また資料室が受贈・受託した被災資料の解題や翻刻を見ると、近世から近代にかけての長岡市の町場や農村の生活、生産活動などが浮かび上がってくる。救済活動が地域の再生、再認識につながっていることも感じ取れる。

本書は救済活動のマニュアルではないが、図書館員や文書館員は一読しておきたい書である。

最後に、同地方は、この大震災のほかに水害（平成16年7月新潟・福島豪雨）と3年後の地震（平成19年（2007年）新潟中越沖地震）からの復旧にも取り組んでいることを附記しておきたい。

（主題情報部人文課　大和田（おおわだ）　孝志（たかし））

日本のふるさと野菜

芦澤正和監修、野原宏編　日本種苗協会刊
〒113-0033　文京区本郷2-26-11　種苗会館7F
2009.4　195頁　30cm　　＜請求記号　RB181-J24＞

本書によると、日本で栽培され、市場に出荷されている野菜(キノコを除く)の数は、種類の区分の仕方・数え方で前後するものの約30科150種類存在する。このうち、もともと日本に自生していたものは20種弱で、大半は時期の差こそあれ外国から伝来・導入したものだそうである。「ふるさと野菜」とは長い歴史の中で取捨選択が繰り返され各地方・地域に定着し、独自に栽培されてきた野菜を指すが、どのような野菜が思い浮かぶであろうか。京野菜の九条ネギ、長野県の野沢菜などはなじみがあるかもしれない。

本書はおもなふるさと野菜を写真を添えて紹介している。野菜の品種ごとに由来・伝来、栽培されている地域や時期、大きさや色など見た目の特徴を記し、品種によっては味やどのような調理に向くかといったことなども書かれてある。あまりなじみのないものも取り上げられているので、写真が白黒である点は残念だ。また、月刊誌『種苗界』に22回にわたって連載していた「地方野菜シリーズ」を再編成したためか、項目などのばらつきも気にはなるが、読み物としてどこから読んでも気軽に楽しめる。

また本書では品種の五十音順だけではなく、ナス、ニンジン、ネギといった「作物ごとに各品種を整理し利便性を高めた」とある作物別の索引が大変役に立つ。「賀茂ナス」のように品種名で種類がわかるものもあるが、「御幸千成」や「黒十全」など品種名だけでは何の作物か見当もつかないためである。

さらに、農林水産省統計表の1910（明治43）年から2000（平成12）年までの数値を10年おきに抜き出した作付け面積、生産量の動向を示した表も付されている。この間1度も首位の座を明け渡すことなく、作付け面積と生産量ともに第1位であり続けた野菜がある。何かおわかりだろうか。ダイコンである。最新のデータを農林水産省のホームページで見たところ、第2位との差が年々縮まってきてはいるが、いまだにダイコンが第1位であった。ただし、北から南の広い地域で栽培されているその姿は、白く長大な円柱状のものばかりではない。例えば、「岩国赤ダイコン」は、カブのように扁球形で、外皮は鮮紅色である。山口県の「とっくりダイコン」は、葉元が細く先端にいくにしたがって太い。東海地方の「守口大根」は、直径が約3cmで細く長さは1m近くにもなる。また「秋田大根」は、雪に閉ざされる冬期の保存食である漬物用のダイコンとして普及したとあるように、それぞれのふるさと野菜はその土地の風土とも関係していて興味深い。

野菜は身近で必要不可欠な食品ではあるが、意外と知らないことが多い。地産地消という動きが注目されるいま、あらためてふるさと野菜を見直してもいいのかもしれない。（総務部総務課　中澤（なかざわ）　貴明（たかあき））

※日本種苗協会ホームページ（http://www.jasta.or.jp/）を通じて購入することが可能。

新発見・豊臣期大坂図屏風

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター* 編・刊
（なにわ・大阪文化遺産学叢書　19）
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35　関西大学博物館内
2010.3　85頁　26 cm　　＜請求記号　KC117-J6＞

古来、さまざまな美術品がシルクロードあるいは海を渡って東西を往来した。奈良時代に舶来した文物が東大寺の正倉院に納められ、約400年前に渡来したと思われるベルギーのタペストリーが、京都の祇園祭の山鉾を飾る。同様に、日本の美術品も西洋に渡っていた。21世紀初め、オーストリアの古城に極彩色の屏風が残っていたというニュースが日本に伝わり、研究者たちを驚嘆させた。発見された屏風に描かれていたのは、豊臣秀吉が築いた豪華な大阪城と、町人たちの賑わいが聞こえてきそうな城下町の風景であった。豊臣時代の大阪城と城下町を主題として描いた絵画は希少であり、現存するものとしてはほかに3点が知られるのみである。

八曲一隻の屏風は、現在、一扇ずつ分割され、グラーツ市郊外のエッゲンベルグ城の壁面に貼り込まれている。長い間、注目を集めることはなかったという。

1990年代、初めてこの絵に着目したのは、エッゲンベルグ城博物館の学芸員である。その後、修復などを経て屏風の存在が日本に伝わり、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターとエッゲンベルグ城、大阪城天守閣の三者間で共同研究が進められることになった。屏風は「豊臣期大坂図屏風」と名付けられ、作画年代は豊臣期より少し後の17世紀中頃であることがわかってきた。

本書は、数年に及ぶ研究を経て、2010年3月に「豊臣期大坂図屏風」の解説本として刊行された。折込みページを開くと、往時の姿を再現した屏風の全体像を見ることができる。人々がまとう衣装は赤・緑・橙の色が際立ち、場面を区切る源氏雲の金、川や堀の群青色と相まって絢爛な桃山文化の雰囲気を伝える。

本篇はまず、屏風発見の経緯から豊臣期の大阪城下の様子など、屏風絵の背景となる事実を紹介しており、エッゲンベルグ城のロココ調の壁面を飾る現在の屏風の写真も掲載されている。

次に、描かれている地域ごとの解説がある。研究の結果、この屏風は上部と下部がそれぞれ別々の方向から大阪の街を描いていることが判明した。上部に描かれた四天王寺や住吉大社、堺の位置関係は、西から大阪を見たときのものであり、一方で、下部の大阪城や船場の町並みは北から見たときの構図で描かれているという。

最後は、「人びとの暮らし」に着目し、身分や職業などによって精緻に描き分けられた人々の様子を取り上げている。

本書はこれまでの研究成果をふまえ、画集として、また「豊臣期大坂図屏風」の手引書として楽しむことができる。屏風研究の経緯や成果は、2007年と2008年の国際シンポジウムの報告書に詳しい。

（主題情報部政治史料課　中嶋（なかしま）　恵子（けいこ））

＊平成22年4月に大阪都市遺産研究センターとして新たに発足。
※本書は平成22年4月に清文堂出版からも刊行されている。

第52回 科学技術関係資料整備審議会

1月19日、東京本館において、第52回科学技術関係資料整備審議会が、有川節夫委員長ほか審議会委員および専門委員10名の出席のもと開催された。国立国会図書館からは、館長、副館長ほか15名が出席した。今回は、科学技術関係資料整備審議会基本方針検討部会がとりまとめた「国立国会図書館における今後の科学技術情報整備の基本方針に関する提言」（案）について審議が行われ、全会一致で了承後、有川委員長から長尾館長へ提言が手交された。

提言では、科学技術情報の生産、流通、利用、保存のすべての段階で電子情報資源が主要な役割を果たすようになっており、我が国全体としての学術情報基盤である「知識インフラ」の構築およびその推進が必要とされている。国立国会図書館は、「知識インフラ」の中核として、これまで取り組んできた電子図書館事業を発展させ国内の電子情報資源の収集、保存等を進めるとともに、「知識インフラ」の構築のため関係機関との協議の場の形成に向けた働きかけと調整を行う必要があると述べている。その上で、国立国会図書館が近い将来取り組むべき事項として、国内学術出版物のデジタル化と電子情報資源の収集、デジタル化のための環境整備、電子情報資源の管理・保存、電子情報資源の利活用の促進、従来の所蔵資料・サービスと電子情報資源との有機的連携、利用情報の解析と利活用、知識インフラの中核としての社会的機能の展開、の7項目を掲げている。

また、主題情報部長から、今回の提言を受けて、平成22年度中に、国立国会図書館の第三期科学技術情報整備基本計画を策定することが報告された。

審議会に関する情報は、国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞国立国会図書館について＞審議会・科学技術関係資料整備審議会（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/council_technology.html）に掲載している。

おもな人事

＜異動＞
※（　）内は前職

平成23年1月1日付け

専門調査員　調査及び立法考査局外交防衛調査室主任

（主幹・調査及び立法考査局外交防衛調査室付）　鎌田　文彦

法規の制定

【規則第１号】議会開設百二十年記念議会政治展示会協議会規則を廃止する規則

（平成23年１月５日制定）

議会開設百二十年記念議会政治展示会が終了したので、同展示会協議会規則を廃止した。平成23年１月５日から施行された。

なお、この法規は、平成23年１月５日付けの官報に掲載されている。

東京本館で新たな書を展示

真神巍堂（まがみぎどう）氏の書「読書萬巻始通神」（読書万巻始めて神に通ず　蘇東坡の詩の一節から）の寄贈を受け、東京本館の新館講堂前に展示した。

真神氏は1943年生まれ、村上三島氏に師事。日本書芸院副理事長、京都教育大学名誉教授、臨済宗建仁寺派宗務総長、日展会員。平成21年、第41回日展会員賞受賞。現代書道二十人展出品者。

国際子ども図書館講演会「日本の子どもの文学ー昨日・今日・それから」

国際子ども図書館は、3月12日に、展示会「日本の子どもの文学ー国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」に関連する講演会「日本の子どもの文学ー昨日・今日・それから」を行います。

講演会では、展示会の内容について展示会監修者の宮川健郎氏から、戦後の新しい児童文学の発展について児童文学の専門家である神宮輝夫氏からお話しいただきます。また、講演に引き続き、展示会をとおして見る日本の子どもの文学について、お二人に対談していただく予定です。入場は無料です。

○日　　時　　3月12日（土）14:00～16:30
○会　　場　　国際子ども図書館ホール（3階）
○対　　象　　中学生以上（定員約100名）
○プログラム
「展示会を企画して」
講師：宮川健郎氏（武蔵野大学文学部教授）
「新しい児童文学の誕生と発展」
講師：神宮輝夫氏（青山学院大学名誉教授）
対談　神宮輝夫氏、宮川健郎氏
○お申込方法
次のいずれかの方法で、参加者1名につき1通に、氏名（ふりがな）、年齢、郵便番号、住所、電話番号をご記入の上、2月25日（金）までにお申し込みください（必着）。申込多数の場合は抽選となります。
［往復はがき］〒117-0007　台東区上野公園12-49
国際子ども図書館「3月12日講演会」係
［電子メール］nkb0312@kodomo.go.jp
（タイトル・件名欄に「3月12日講演会申込み」とお書きください）
○お問い合わせ先
国立国会図書館国際子ども図書館　企画協力課企画広報係
電話　03（3827）2053（代表）

レファレンス業務に関する研修に講師を派遣します

各図書館でレファレンス業務に関する研修を実施する際に、国立国会図書館の職員を講師として派遣します。

○対　　象　国内の公共・大学・専門の各図書館または関連する協議会などが主催する研修

○内　　容　次のテーマから選択してください。

①インターネットで使えるレファレンスツール

②図書館によるビジネス支援に関するレファレンスツール紹介（経済産業分野または科学技術分野）

③法令・議会・官庁情報の探し方

④アジア関係資料の調べ方（中国または韓国）

⑤レファレンス協同データベース事業の紹介

⑥国立国会図書館のレファレンス業務の紹介

⑦国立国会図書館の展示業務の紹介

○派遣時期　平成23年4月～9月

ただし、テーマ②、⑤は上記期間以外でも派遣可能です。

○経　　費　旅費（交通費・宿泊費）を負担していただきます。謝礼金は不要です。

○お申込方法

国立国会図書館ホームページに掲載している「派遣研修申込書」にご記入の上、3月4日（金）までに電子メールでお申し込みください。

＊派遣の可否は3月18日（金）までにご連絡します。

＊申込期間以外でも上記の研修に関するご相談を受け付けています。ご希望がありましたらお早めにご連絡ください。

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館　主題情報部参考企画課レファレンス係（派遣研修担当）

電子メール　haken-kenshu@ndl.go.jp　　電話　03（3581）2331（代表）

※詳細はホームページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）

＞図書館員の方へ＞図書館員の研修＞派遣研修（派遣先募集のご案内）

URL　http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/guide/1190834_1485.html

新刊案内

国立国会図書館の編集・刊行物

レファレンス　720号　A4　86頁　月刊　1,050円　発売　日本図書館協会

・新年にあたって

・高等教育の評価制度をめぐって

・国連平和構築委員会の現状と展望

・核の拡大抑止と日本の安全保障

・欧州におけるペット動物保護の取組みと保護法制

参考書誌研究　第73号　A5　53、28頁　半年刊　2,835円　発売　日本図書館協会

＜リサーチ・ナビ―調べものに役立つWebサービス―その3＞

・数字で見るリサーチ・ナビ　―アクセス状況とサービス改善に関する考察―

＜書誌＞

・受入後に発禁となり閲覧制限された図書に関する調査

　―戦前の出版法制下の旧帝国図書館における例―

＜資料紹介＞

・大久保利謙先生に聞く―近代政治史料収集のあゆみ（一）―

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.599 2 February 2011

CONTENTS

02 Book of the month - from NDL collections
Yume no tamakura
Kibyoshi (Japanese yellow-backed-cover picture book) retouched by Dr. Mitsutaro Shirai

04 Focus : Periodicals
05 Discussion on periodicals
Search, find and search again
with Yuichiro Kurihara, Kyoko Shibano and Ayashige Nandaro
14 Periodicals in NDL
22 Illustrated guide to the work of NDL
ISSN (International Standard Serial Number)

24 Essay on languages (2) Verbs

21 <Tidbits of information on NDL>
Japanese Periodicals Index : the road to ten million articles

25 <Books not commercially available>
○*Niigataken Chuetsu Daishinsai to shiryo hozon (1) : Nagaoka Shiritsu Chuo Toshokan Monjo Shiryoshitsu no kokoromi*
○*Nihon no furusato yasai*
○*Shinhakken Toyotomiki Osakazu Byobu*

28 <NDL News>
○52nd meeting of the Council on Organization of Materials on Science and Technology
○Changes in personnel
○Laws established
○New calligraphic work on view in the Tokyo Main Library

30 <Announcements>
○Lecture at the International Library of Children's Literature "Japanese children's literature - yesterday, today and tomorrow"
○NDL dispatches lecturers to reference service training programs
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 山田敏之
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成23年2月号(No.599)
平成23年2月20日発行 定価525円
(本体500円)

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜すいして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ(http://www.ndl.go.jp/)>「刊行物」>「国立国会図書館月報」)でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

ぼすとういき著　*Kohana san*
長谷川武次郎　廣瀬安七（印刷）　明治25（1892）年
20 cm　p. 6
＜請求記号　W174-B1＞

国立国会図書館月報
平成23年2月20日発行（毎月1回20日発行 2月号 通巻599号）
発売：社団法人 日本図書館協会　定価525円（本体500円）